

討 論

皇學館大学文学部教授

京都大学名誉教授

國學院大學神道文化学部教授

神宮権禰宜

(司会) 皇學館大学非常勤講師

岡田 勝山 茂木 吉川 千種
登 次 清 貞 純 美
美 実 純 次 登

(千種)

岡田先生から「伊勢の式年遷宮を考える」ということで、様々に本当に大きな題名でしたので、資料も大変なものになりましたけれども、遷宮の全般についてわかりやすくまとめ頂きました。また、お手元の所に質問用紙というのが入れているかと思えます。御座いますでしょうか。そちらに、是非、今回、今、ご講演を聞いて頂いて質問事項があれば書いて頂きたいと思えます。それを、これからあと十分、後に始まる討論の中でも、使わせて頂きたいと思えますので、是非、その質問用紙に何か質問があれば書いて頂きたいと思えます。ここであと十分休憩致しまして、討論の方を十四時五十分、二時五十分から始めさせて頂きたいと思っております。それでは、今から少し休憩を取らせて頂きます。岡田先生どうも有難うございました。

(千種)

時間になりましたので、今から討論会に入らせ頂きたいと思えます。先ほど、発題をして頂きました岡田登先生には引き続きお願い致しまして、ここに三人の先生方を加えて討論会に入りたいと思えます。京都大学名誉教授の勝山清次先生、國學院大學神道文化学部教授の茂木貞純先生、そして神宮権禰直で神宮司庁広報室の広報課長でいらっしゃいます吉川竜実先生、皆様をお願いしたいと思います。それでは、まずお一人ずつ十分から二十分、先ほどの岡田先生のお話に補足的な要素を加えて頂こうと思えます。お一方ずつご提案を頂きたいんですけれども、まず勝山先生からお願い致したいと思えます。勝山先生のプロフィールなどは、こちらにございますけれども、先生は昭和二十三年に石川県にお生まれになりまして、三重大学教授、京都大学大学院文学研究科教授などを歴任されまして、今年の三月に定年退職されて現在京都大学名誉教授でいらつしやいます。先生は特に中世の伊勢神宮成立史の研究をなさつていらつしやいますので、是非中世を中心にお話を頂ければと思えます。それでは、勝山先生よろしくお願致します。

(勝山清次)

御紹介に与かりました勝山です。岡田先生のご講演は遷宮について全般的に論じられたものですから、私も色々知らないことを多く教えて頂きました。そういう意味で非常に有難いと思つております。御紹介ありましたように、私は中世史を専攻しておりますので、中世の神宮、その中でもごく一部について補足を中心としてお話できればと思います。具体的には二つお話ししようと思ふんですが、岡田先生のご講演で、私としては訂正して頂きたいなという点を申したいと思えます。それは古代末から中世にかけて、神戸・神田が衰退し、御厨・御藪が形成されたと捉えら

シンポジウム「伊勢の式年遷宮を考える」

れておられる点です。私自身伊賀の方にありました伊賀神戸について、これは割と史料が断片的ではありますが、残っておるものですから調べたことがあります。その時、分かったんですけれども、伊賀神戸の周辺に十一世紀以降、御厨・御園という形で、新しい神宮領が形成されました。それとともに、伊賀神戸自体も中世的な一つの所領、一種の莊園と言っても良いかと思うんですが、そういう形で変化していったということで、衰退というのを一般化することはできないんじゃないかと考えております。ですから多くの神戸・神田が中世的な所領に変化する。その一方で、新たな神領として、膨大な数に上る御厨とか御園が形成された。ですから、神戸・神田の比重が御厨・御園が多くなったものですから、またそれがもう圧倒的に多くなったものですから、それまでと比べて、比重が変化したとそういうふうな位置づけの方が私はいんじゃないかというふうに考えております。

もう一つは、これは純然たる補足で、非常に細かい話で申し訳ないんですが、ご講演で役夫工米が承保三年(一〇七六)からとされております。この役夫工米の成立時期に関わる問題です。伊勢神宮役夫工米が成立するというのは、正遷宮の造宮役が諸国にあてられて、それぞれの国で一國平均役として賦課されるようになることです。その時期は、いわゆる内裏を作り直す造内裏役であるとか、あるいは興福寺を造る造興福寺役などに比べますと若干遅れたと見られておりまして、現在は、承保・承暦年次の遷宮からであるとされております。このことについてちょっと考えているところをお話ししようと思えます。

この説を最初に唱えられましたのは、小島鉦作さんです。戦前の「大神宮役夫工米の歴史的考察」という論文の中でありまして。小島さんは承保・承暦年間に播磨とか丹波といった国々に課されております「遷宮召物」、「めす」というのは、「召使」の「召す」、それから「物」は「ブツ」ですね、その遷宮召物のことを後の役夫工米のことだと解しまして、これを史料的な根拠とされている訳です。この解釈を批判されたのが、小山田義夫さんという方でありまし

て、この遷宮召物を役夫工米の前身をなすものではなくて、遷宮行事所、先ほどもお話でしました行事所です、遷宮のことを担当する役所です、遷宮行事所が管轄し、遷宮の諸用途に充てられる造宮料物、先ほどの神宝などを作るのにも充てられたと思いますが、そういう造宮料物のこととみなされまして、小島説の史料的な根拠を否定された訳であります。私は、この批判は当たっていると思います。ですから、遷宮召物は、役夫工米の前身と見なすべきではないと思います。そういうふうには批判された上で、小山田さんは改めて成立時期を検討されまして、結論としては同じく、承保・承暦年問とされた訳であります。その立論は、ほぼ次のようになされております。

まず、次の遷宮が行なわれました嘉保・承德年次におきまして、役夫工米が諸国で賦課されたということが指摘されます。この時、その遷宮行事所の行事弁、実務を担った役人ですが、行事弁となりました中御門宗忠というお公家さんがおりますが、その宗忠がその日記にですね、役夫工米に関する記事を多数載せておりますけれども、そこにはですね、この年次から役夫工米の徴収という制度が始まった、施行されたという記事は見られない訳です。それはこれ以前に、既にこの制度が始まっていたからなんだとされる訳ですね。そして、これを踏まえまして、小山田さんはそれからあまり遠く離れていない式年遷宮時である承保・承暦年次に、これが始まったとされる訳であります。

これが現在通説になっております。しかし、この小山田説もですね、よく考えてみますと、論理的に嘉保・承德年次より前だということが分かるかもしれませんが、直前の承保・承暦年次とする積極的な根拠を何ら示しておられないという点で問題を残しております。また「役夫工」という表記が史料上に出てまいりますと、それをそのまま一国平均役であるというふうに解釈しているのも問題かと思えます。そこで、改めてこの成立時期を検討してみたいと思います。ただ、どれだけきちんと詰められたかという点、問題が残るかもしれませんが、私は、次の二点に注目したいと考えております。

一つは、嘉保・承德年次の造宮役の賦課のあり方です。承保・承暦の次の造宮の時です。その時の造宮役の賦課のあり方があります。先ほど言いましたようにこの時、中御門宗忠は内宮・外宮双方の行事所の弁となりまして、その事務を担当した関係で、その日記には多数の遷宮関係の記事が残っております。載せられております。それらを見ますと、第一に諸国に役夫工料があてられています。それから、第二に、国名を見ますと摂津・伊勢・遠江・駿河・美濃・越中・丹波・美作・土佐といった国々で、これが荘園に賦課されているということが分かります。この二点から、少なくともこれらの国々で役夫工料が一国平均役として課されていたということが分かります。その一方で注意されますのは、この遷宮の時に一国平均役ではなくて、国衙領に課される官物、これは荘園の年貢にあたる物です、その官物の賦課額、斗代をあげることで用途を調達しようとする国もあつたことです。知られているのは、伊賀であります。この伊賀の場合にですね、寛治七年（一〇九三）には東大寺の荘園の加納田、東大寺の荘民が国衙領へ小作に出て作っている土地です、その加納田に対して臨時の加徴、臨時の賦課を課せうとしています。ところが、その翌年の嘉保元年に国司、国の守が替わりますと今度はですね、それらの田地、加納田に対して臨時加徴を課すのではなくて、その田地に賦課される官物の斗代、賦課額を引き上げることによって役夫工の費用を確保しようとした。この場合加納田で、そうでありますので、一般の荘園にも一国平均役として、賦課されていないというふうに理解すればいいと思います。このように、嘉保・承德年次には、一国平均役として賦課される国々が多数見られる一方で、そのような形態をとっていない国もあつた訳であります。従つて、この段階では一国平均役の形態、つまり役夫工米というのは一般化していない、また定着していない、とみられます。これは役夫工米の一国平均役化、あるいは一国平均役としての賦課が始つてからまだ日が浅いということを示していると考えられます。これが一点目であり、ます。

それから二つ目にはですね、この問題の十一世紀後半以降ですね、朝廷において皇祖神であります伊勢神宮に対する尊崇の念が急激に高まっていることが挙げられます。例えばですね、公卿勅使、これは朝廷で難儀なことがあった場合、公卿を伊勢神宮に派遣して奉幣する、その使のことです。公卿勅使の派遣が一〇七〇年代になりますと五〇年代に三回、六〇年代に二回であったものが、六回というふうに急激に増加いたしました、この傾向はそれ以降もしばらく続いております。また、この十一世紀後半には内宮が宗廟と見做されるようになります。その初見は、承暦三年（一〇七九）ですね。これを見ますと、朝廷において神宮に対する尊崇の念が強まっていた承保・承暦年間に造宮の為の用途をより確実に調達するために、一國平均役の賦課が始められたということは十分考えられると思います。但し、それは次の嘉保あるいは承徳年次のあり方から窺えますように、全ての国で行なわれたというものではなかったとしなければなりません。

ではこの役夫工米賦課が広がったのはいつかと言いますと、それは次の遷宮であります永久年次、内宮が永久二年（一一一四）、外宮が同四年の時であったと考えられます。まず、この時からですね、莊園に対して、諸国の莊園に対して役夫工米を免除した文書が見られます。これは役夫工米の莊園への賦課が一般的に広まったことを示しております。次に個別莊園ではなくて、莊園領主が諸国に亘って存在した所領全体に対して、まとめて免除を申請する事例が見られるようになります。これは諸国に散在する所領に対して一括して免除を要求する訳ですから、一國平均役賦課が特定の国に限られていなかったことを示しております。以上、これらの点から、この永久年次に役夫工米の一國平均役賦課が全国的に行なわれるようになったと見ていいと思います。そしてそれが鎌倉、南北朝、室町まで継続した、具体的な形態は時代によって変わりますけれども、基本的に継承されるというふうになったのではないかと考えております。以上、神戸・神田が衰退したという理解に対するちよつとした疑問と役夫工米成立期の問題、細か

い話で恐縮ですが、お話致しました。後で議論のきっかけとなって色々、お教えいただければ、有難いなと思っております。

(千種)

勝山先生からお話を頂きましたが、御指摘が二つありました。神戸・神田の衰退というよりは比重が低下していた、変質ではないかという点。そして二点目は役夫工米の成立時期と、それは私たちは臨時税が掛かると一遍に全国に広がったのかというふうに思いがちなのですが、そうではなくて徐々に全国に広まっていったという部分、成立時期とその変遷について御指摘があったかと思えます。それでは続きましてそのお隣にいらつしやいます茂木貞純先生からお話を頂きたいと思えます。先生は昭和二十六年、埼玉県生まれで、神社本庁教学研究部長、総務部長等を経て、現在、國學院大學神道文化学部教授をしていらつしやいます。先生には遷宮の全般についてお話を頂きたいと思えますが、先生の著書で『遷宮をめぐる歴史―全六十二回の伊勢神宮式年遷宮を語る―』(茂木貞純・前田孝和共著、明成社、平成二十四年)は私も拝読しておりまして、第一回から順番にどのような遷宮を行っていたのか時代背景とともに書きになっておられて、非常にわかりやすい本だなと思つて読ませて頂いております。それでは茂木先生よろしくお願い致します。

(茂木貞純)

こんにちは。このような席にお招き頂きまして大変光栄に思っております。今、御紹介を頂きましたように、二十五年前になるんですけれども、友人と二人で、『遷宮をめぐる歴史―歴史をたづぬく神宮崇敬―』(茂

木貞純・前田孝和共著、神道文化会、昭和六十三年）という本を書かせて頂きました。前回の御遷宮の準備が進められている頃なんですけれども、当時の認識からしますと大変遠い昔に式年遷宮という制度が立てられて、今日まで長くきたと、こういうことだったんですけれども、本当にちゃんと繋がっているのだろうかというようなことを疑問に思いまして、当時はあまり啓蒙的な本も出ておりませんでしたので、何とかそういうきちんとした一般の人にも分かるようなものが出来ないだろうかということで、ちょうど皇學館大学では、「神宮と式年遷宮」という文化講座をなさっていて、それをまとめられた本が出版されました。午前中の渡辺先生の研究発表にもあったわけですけども、ああいう本を参考にしながら、初めから前回ですから第六十一回の式年遷宮までをなんとか時代背景とともに書けないだろうか、と大それたことを考えまして、書かせて頂きました。とても十分なものとは言えないですけども、今回また、明成社というところで再版をして頂きました、割合と読者を得ているようであります。有難いことだと思っております。そういうことで、少し神宮の式年遷宮を世間の人に知って頂くお役に立てているのかなと、そういう立場でお話をさせて頂きたいと思っています。先ほど、非常に熱のこもった岡田先生の式年遷宮の全体に関わる御発表を伺って、少し私の感じましたことをお話していききたいと思っております。

三つお話をさせて頂きたいと思っておりますが、一つ目は、午前中の渡辺先生の御指摘された継続性と連続性ということなのでありますが、非常に長い継続性が最大の特徴ではないかなと思っておりますが、これは当然ながら神話伝承の世界から始まっている訳であります。天照大御神の天孫降臨に際する神器の授与、稲穂の授与、というような神話から神武天皇の建国の伝承、そして崇神天皇の時代の疫病が流行するという国難、そういうことを踏まえて、同床共殿でお祀りをしてきた神授の神鏡を同床共殿ではなく大和の笠縫邑にお祀り申し上げ、さらに次代の垂仁天皇の時代に倭姫命が神鏡を奉じて伊勢に御鎮座になされる。そして丁重なお祭りがされたのだろうかと思う訳では

ありますけれども、さらに時代が下って雄略天皇の時代に外宮が鎮座をされるわけであります。ここで先ほどは倭姫命の時代から日別朝夕大御饗祭をやっていたんじゃないかというお話がありました。伊勢の神宮の見解からいいますと日別朝夕大御饗祭がここで始まって、以後途絶えることなく今日まで続いている。そして、四十代の天武天皇の時代に式年遷宮が立制をされ、そして持統天皇の御代に第一回の式年遷宮が行なわれた。こういう経過であります。その時に様々な式年遷宮に関わるシステムが作り上げられた訳ではありません。おそらく造宮使だとか造神宝使等のシステムも整えられ、材木や資材の調達のシステムも作り上げられただろうなど想像する訳であります。そういう中で、十八回の式年遷宮からは御杣山が宮域、内宮であれば神路山や外宮の高倉山から離れて、先ほどの岡田先生のお話にもありましたように離れて行きます。用材が近くの山から採れない、こういうことになってきました。

しかし、なんとか調達して続けられる。さらに三十四回の式年遷宮からは御杣山が遠くに求められたということと恐らく関係するんであります。これまでは一年に一度の最大のお祭りであり、神嘗祭に合わせて式年遷宮が行われてきた訳ではありませんが、神嘗祭の夕の由貴大御饗と朝の由貴大御饗の丁度、間に旧殿から新殿に神器が遷ると、そして新しい御殿で朝の由貴大御饗を奉ると、そういう古来以来の式年遷宮のあり方が改められて、遷宮祭が独立して、神嘗祭の前に行なわれるというようになり方になっていく訳であります。しかしとうとう、四十回の式年遷宮を区切りにして、内宮で言いますと百二十三年間途絶えてしまいます。正に中世戦乱の時代に入って行きます。

そして、天正十三年（一五八五）になって両宮でこれが復興してくる訳ですね。それ以降は江戸幕府の費用による式年遷宮という形で、非常に安定的に遷宮が行なわれて参ります。そして、明治維新後は政府の直営で式年遷宮が行なわれます。しかし、戦後、政教分離で遷宮造営費の調達というような点では、非常に苦しい時代を迎えた訳ではあります。長い歴史を見てみますと、まずは国家の日本の国の発達に伴って少しずつ制度が充実してきたと、こうい

うことが言えるのではないでしょうか。それともう一つは、時代の進展とともに当然ながら千年も続く制度はありませんので、制度が崩壊してもそれを補完するシステムが生まれてきます。それからもう一つは、この最初の御遷宮から見ますと少しずつ内容が充実してきている。別宮や撰末社の遷宮も行なわれるようになりますし、御神宝の数も時代を下ったほうが増えて参ります。減ることが無い訳ですね。これは、簡単に言いまして天照大御神への信仰がまさにこれを支えているといつてよいわけです、そう思うんです。

第二点目なんですが、この継続性を支えている根底であります。そのことを少し考えてみたいと思うのです。先ほどの岡田先生の御説明の中には、垂仁天皇の御代に御鎮座される訳であります、三世紀末というふうに御説明頂いた訳です。これは考古学的な立場からの御見解だと思っております、おおよそ二千年前という神宮の御説明もある訳です。そういう説明に私はしておきたいと思えます。ここで恐らく神宮の最大のお祭りである神嘗祭は毎年これ以降行なわれてきたのだらうと思えます。千五百年前に外宮が鎮座し、日別朝夕の大御饌がはじまる。そして、千三百年前に第一回の六九〇年に第一回の式年遷宮が行なわれる。そして、中世の時代に百二十数年の中絶期があるわけですが、今日までに六十二回の式年遷宮が行なわれている。その継続の元になっているのは、結局毎年毎年行なわれる祭りですね。恒例祭です。その中心が何度も言いますように神嘗祭である訳ですが、同時に六月十二月の月次祭、この三節祭ですが、このときには夕と朝、二回由貴大御饌が奉られます。特に新穀を奉る神嘗祭が重要な訳であります、この神嘗祭には付属のお祭りがあります。御承知の通りですけれども、四月の初旬に神田下種祭というお祭りがあります。神職の方々は、この下種祭に当り、すぐに田んぼに種を蒔くのではなくて、まず山に行って山口祭を行なって山で耕作をする為の鋤の柄を採る、そういうお祭りをして、そして、山の蔓草を蔓に結って山から下りて来て、その山は忌鋤山といわれるようでありますけれども、神聖な山の靈気を帯びた鋤、忌鋤で耕作を始め、そこに神聖な

種を下ろす、忌種を下ろす、そういう神事から始まる。そして五月、一か月くらい後に御田植え初めという行事が行なわれ、さらには九月に抜穂祭が行なわれ、その初穂を持って、初穂が収穫されてすぐに神嘗祭を迎えます。基盤には生産が伴っている訳でありますね。実際に、そういう構造であります。

この生産というのは私たちの命を繋ぐ大事なものでありますから毎年、毎年必ず行なわれる訳で、その節目節目に恒例祭というのがあって、それが神宮の恒例祭の基盤になっているということです。先ほど申し上げましたように、式年遷宮が、かつて神嘗祭の間に行なわれたということは、式年遷宮の基盤はまさに稲作りにある訳です。そうしますと、神話の昔に遡って天照大御神から頂いた稲種を我々は今も、神の教えとして守って生活する。そういう形が崩れていないということです。まさに日本人の生活の文化の原型をそのまま祭りという形で伝えているじゃないかなと思います。実際にこの伊勢神宮だけではなくて、日本中のお百姓さんが米の生産を神事と捉えている人はあまりいませんけれども、しかし、水口祭りから始まって秋の霜月祭りを行なっている意識として、神ごとという形で米作りに励んでおられる。そういう意識が根底にある。その本当の形をここでは伝えている。先人は残しているじゃないかなと思いますね。それが長い継続性の基盤になっているということじゃないかなと思います。生産は毎年行なわなければいけません。それに伴う祭りは毎年行なう訳でありますから、その祭りの場である御殿が崩れているということはありえないことでもあります。復興のエネルギーもそういうところにあつたのではないかなというふうに思っております。

第三番目であります。古いものを守る精神というのが非常に強くある。古風を守る精神です。制度は、制度を作っても時を経るに従い、制度疲労を起こしていく訳であります。それをとにかく補完する歴史があつたことは申し上げましたが、御杣山の変遷の中で一番そのことを感じる訳です。資源が枯渇をしていくと、そのために色んな努力

を重ねられたのでしよう。その過程で様々なことを学び努力が重ねられたらうと推測をする訳であります。古い時代のことはよくわからないですが、先ほども岡田先生からお話がありましたように明治天皇が、明治三十年代に、礎石を置いてコンクリートで固めて柱を立てれば、たった二十年ではなくて、二百年位保つのではないかと、その間に用材が育って式年遷宮も安定的に行なわれるようになる、と側近の者が進言をし、そのような方法がとれないかと申し上げました。しかしそれを却下されて「素朴な造営を以って祖宗建国の姿を知らしむべし」と、かつて先祖がこの国を建てた時の姿を伝えていくべきだと、申され同時に神宮に備林を整備されたということでもあります。これは明治天皇のエピソードとして残っている訳ではありますが、おそらく同じような精神が過去にもあったのではないかと想像する訳であります。

とにかく元始の形を守ると、そして長い時代が経ちますとそれが少し崩れる訳ですけれども、廃れば元に戻そう、復元しようとする努力が過去にもたくさんあります。それから御神宝装束の調製の中では古法を守るために本様使という制度がありました。前回の遷宮以降二十年間保管された御神宝装束を都から遣わされた造神宝装束使から遣わされた本様使が古い御神宝を調査をし、同じように作る制度を持ってきたということですね。また天正年間に遷宮が復興して以降、江戸幕府が遷宮のことを差配するようになる訳で、「遷宮条目」というものを定めておりますが、その中でも「古法を守り新儀を企てざる」と堅く戒めております。古法を守るという精神がずっと伝えられているのではないかと思うのです。御神宝装束を見ますと、そういう形で一貫して京都で作られてきたということに私は意味があるのではないかと、技術が集約されて発展伝承されて来たのです。様々な御神宝類、御装束類があるわけですが、結局、神宮は天照大御神の生活をする場でありますから、生活万般のあらゆるものを含んでいる、あらゆる技術を含んでいます。染色・織物・組物・木工・金工・漆工、我々の生活に必要なあらゆる生活技術、そういうものが集約さ

れているのではないかと、それは古い物を守りながら、新しい発展の可能性さえも含みながら、京都という文化センターで伝えられてきたということに大変意義があるのではないかなと思うんですね。

戦後になって例えば葛箱の製作者が居なくなってしまう。あつという間に居なくなってしまった訳ですね。これは戦後の急激な変化の中でそういうことが起きた訳であります。鴝の羽につきましても農薬の使用その他で、あつという間に鴝が絶滅してしまったということです。しかし、よく考えてみるとその他の多くのものは何とか残っているということは、それが千三百年も続いているということは正に奇跡的なことです。そっちの方に意味があるし、またむしろそういうことを伝えてきたところに我々が学ばなければいけないのではないか、と思うわけです。特に御神宝装束の製作について、日本の物作りの原点がきっちり伝わっているのではないかと思っております。式年遷宮というのは、大変大きなシステムで長い歴史があつて、なかなかその全体像を把握することが難しいことでもありますけれども、ここには私たちの生活文化の原点が伝わっていることは間違いないんじゃないか、と思います。大変、変化の激しい現代社会の中で私たちは根なし草のような意識が蔓延している訳でありますけれども、歴史と伝統に支えられた古代さながらの祭りが営々と行なわれている神宮という存在に希望を感じるところであります。平成二十三年三月十一日に東日本大震災が起きました。まだ復興も緒についたばかりでありますけれども、翌年二十四年の三月、一周年の時、三月四日、六日、両宮の立柱祭が行なわれ、三月末に上棟祭が行なわれたニュースに接し大きな安堵といましようか、日本の国はこういう祭りをさちつと営々とやっていると、間違いなく時間はかかるけれども、復興出来るだろうな、そういう感じが致しました。以上ちよつと長くなりましたけれども、私の発表を終わらせていただきます。有難うございました。

(千種)

茂木先生、有難うございました。先生から三点の指摘を頂きました。まず式年遷宮千三百年の歴史の中の継続性や連続性ということなのですが、一つは御杣山の変遷ですね。それと神嘗祭と遷宮祭がわけられた、その遷宮のシステムを変えながらも続けていること。更に第一回から考えると今に向けて充実してきたのではないかと御指摘でした。そしてその二つ目は継続を支えるものとして伊勢神宮では年間千五百回を数えるお祭りが行なわれていますが、その恒例祭が支えているのではないかとのお話、その中でも神嘗祭はお米の生産が神事に捉えられて、そのお祭りを神宮は大切に行なっている、生産のお祭りであるという神嘗祭ということ。そして三つ目というのは、古いものを守る精神、古風を守る精神が日本人の性質の一つではないかということでした。御装束神宝、現在は千五百点以上が調製されていますけれども、私も御装束神宝に関しては、三つぐらい取材させて頂いたんですが、そういったものを見ていますと奈良の正倉院展に行きますと、「御装束神宝と一緒だな」と、非常によく似ているものが、たくさん展示されています。それも私の実感なんです、変化の激しい時代にあって、私たち日本人の生活の原点にある、こういったものが今も式年遷宮を通して作られていること等について触れて頂きました。それでは三人目は吉川竜実先生です。吉川先生は昭和三十九年、大阪府生まれで、現在は神宮の権禰宜、そして、神宮司庁広報室の広報課長をしていらっしやいます。また本学の研究開発推進センター神道研究所客員研究員もなさっています。吉川さんは私も取材を通して良くしていただいているんですけども、本当に神宮司庁の広報には各マスコミから取材申請が殺到しているんですね。お聞きしましたところ、去年で数にして千五百件におよぶとお聞きしたんですが、今年はずっと増えているということ。吉川さん自身も全国各地に講演活動等を通じて広報をされていらっしやいます。今日はそんな中いらして頂きました。吉川先生よろしくお願ひ致します。

シンポジウム「伊勢の式年遷宮を考える」

(吉川竜実)

よろしくお願い致します。岡田先生の方を聞かせて頂きまして、本当に意義深い発表だったと思っております。但し、細かい点につきましては、私とは見解が違ふところが多々あるんですけれども、それは討論会にまわしたいと思っております。今回は第六十二回式年遷宮ですが、これを時代区分すると古代・中世・近世・近代とわけられると考えられます。これは國學院大學の岡田荘司さんが仰られたことですが、誰が式年遷宮の費用を捻出したか、もつと平たく言いますとスポンサーは誰だったかということから区分することができないかと思っております。

当然一回目から、先ほど、勝山先生が仰られましたのが、二十一回目か二十二回目か、二十三回目かわかりませんが、このあたりまでは国が全て経費を出したという時代になります。そこからおよそ三十九回目または四十回目ぐらいまでが役夫工米制度による経費が主流でありました。ところで、その四十回目は伊勢の神宮の歴代神主の中で一人だけ重要な人物を挙げるといわれますと、おそらくすべての神宮神職は、藤波氏経という人を挙げると思います。『寛正三年造内宮記』という書物を書いた人で、神宮文庫で現在重要文化財となっている書は、ほとんどがこの氏経が関与している書物ということになります。その氏経の大変な努力と神忠によって四十回目が成し遂げられました。が、役夫工米に当然頼らなければならなかった時代であります。しかし室町將軍家というのは非常に神宮が大好きでしたから、為政者としてほとんど大部分の経費を出しているんです。スポンサーとしてですね。將軍となって伊勢に参宮するというのは室町將軍ぐらいいですから。もちろん源頼朝はじめ徳川家康等につきましても大神宮信仰は深いものがありました。が、但し、それは將軍の代わり者、つまり代参するという形です。そのような中で室町將軍家というのは足利義満以来度重なる参宮をしたということで非常に重要だと考えております。近世のお蔭参りに代表されるお伊勢参りがあれば隆盛を誇ったのは、やはり室町將軍家が伊勢参宮を果たすことによってそのハード面ですね。道

路とか宿泊施設ができました。それがあつたからこそ、江戸時代に伊勢信仰が爆発的に流行するということになるかと思えます。

話がそれましたが、次の四十一回目、天正十三年ですが、内宮ですと百二十年間にわたる遷宮の中絶がありましたけれども、為政者の織田信長・豊臣秀吉によりまして、遷宮の復興が遂げられます。その信長・秀吉の方から徳川家康に移っていくことになります。およそ嘉永の第五十四回まで、遷宮費は為政者の徳川將軍家が遷宮費を出したという事です。因みに信長が三千貫文を出したというのは、今でいうとおそらく三億円くらいにあたるかと思えます。それから先の岡田先生の信長についての発言に関し、幼いころからそのような教育があつたと思いますが、実は信長自体社家出身なんです。福井県に劔神社という二の宮がありますが、そこから尾張に入植したのが織田家です。だから式年遷宮には非常に熱心だったといわれた方が適切であつたと思います。それから秀吉の方はおそらく信長の真似ばかりしていますので、政策上はそれを継いだのではないかと考えられます。そして家康の登場ということになります。家康の座右の書の一つには、『吾妻鏡』があり、晩年によく読んでますから、そのようなことが影響しているのではないかと思えます。ただこれは主要因ではなくて一つの要因ということで述べさせて頂きます。

そして、明治二年に五十五回目の遷宮が斎行されます。この五十五回目から昭和四年の第五十八回まで、明治政府・大正政府・昭和政府という、いわゆる国が遷宮費を出したということになります。但し明治二年の遷宮は、大体八割方、徳川將軍家が供出していますので、これはある意味、半幕半官ということができるともいえます。それから残念ながら大東亜戦争に敗戦しまして四年遅れで五十九回目の昭和二十八年の遷宮が斎行されますが、明治二年とよく似ていますが、戦前にはほぼ七割から八割の経費は確保していますので、これも半官半民といえるかもしれません。

第五十九回・六十回・六十一回・六十二回ということで、よく戦後の遷宮は民間遷宮といわれますが、それは六十回目から本格的になったことになります。従いまして本年、平成二十五年秋に執り行なわれる遷宮は民間遷宮になって実質上、三回目ということになります。これはスポンサーから見るとのことです。誤解なきようよろしくお願い致します。但し民間遷宮といいますが、昭和二十八年の遷宮は、昭和天皇様が非常に危惧なされて御内帑金といいますが、お手元金を神宮にご献進なされております。今上陛下もそれに倣われまして幾度となくご献進なされていきます。ですから民間遷宮ではありませんけれども、皇室が垂範なされて国民がそれを支える遷宮であることを間違えないで頂きたいと思えます。以上がおよそ千三百年にわたる遷宮の時代区分であります。

それからもう一つ、遷宮の祭りについての構成と区分に関して説明させて頂きます。平成十七年から山口祭が始まっていますが、遷宮はおよそ八年の歳月をかけて三十三の諸祭行事が執り行なわれます。そして、この遷宮の諸祭行事は二分されます。つまり宮を造るために営まれる祭りとそれから宮を遷すための祭りということです。山口祭から後鎮祭までが造宮祭になります。そして、その造宮祭の御用材を初めて伐り出す山口祭から大宮地に御用材を曳いてくる第二次御木曳行事までが山作りと呼ばれています。それから次の鎮地祭、江戸時代よく地曳祭といわれたのが、この祭りから後鎮祭までが庭作りと呼ばれています。まさしく斎庭で殿舎を造っていくための祭りにあたっています。つまり造宮祭は山作り・庭作りに二分化されるということです。それから、遷宮祭については御装束神宝読合から御神楽までの諸祭行事のことで、それは前儀と後儀とに二分されます。前儀の方が御装束神宝読合から遷御まで、そして大御饌から御神楽までが後儀ということになります。御治定を仰ぐ祭りは、全部で三十三祭中十二祭あります。従いまして遷宮のクライマックスといわれる遷御は三十三祭中、二十八番目の祭りであり、十番目の御治定の祭りであることとなります。現時点で平成二十五年二月二十五日に遷御並びに御治定の祭りについては陛下に御治定

頂きましたが、まだ御神楽については御治定を仰いでおりません。ですから御神楽は未定ということです。前回の遷宮でいきますと、平成五年（一九九三）十月三日午後七時、というのが内宮の御神楽斎行の時間でございました。外宮は十月六日午後七時でした。以上が遷宮の祭りについての構成と区分です。

次に、遷宮のスパンは二十年に一度とか、二十年毎にとか、二十年周期でとよくいわれますが、およそ古代から中世にかけては、どちらかというと二十年内に一度という時もありました。それから為政者がスポンサーとなっていた近世の。或いは二十年に余ったために二十一年でという時もあります。それから同じ二十年でも時代によってとらえ方が違うという二十年のとらえ方は二十年毎・二十年周期になります。ですから同じ二十年でも時代によってとらえ方が違うということです。そして神宮式年遷宮といういい方ですが、これはおそらく明治時代にできた造語だと思っております。神宮と冠しますのは、先ほど、岡田先生が説明されたように二十年に一度の式年遷宮は、大阪の住吉や千葉の香取、また茨城の鹿島でもありました。但し、それらのお社については鎌倉初期には経済的理由によって式年遷宮は出来なくなります。そして伊勢だけが千三百年に亘って営々と継続してきたということに大きな意義があると思います。

何故二十年に一度なのかというのは式年遷宮の式年の問題です。そしてもう一つは、なぜ宮を遷すのかという遷宮の問題があります。これを別々に考えて理解した方がいいと思います。岡田先生指摘の①番から⑦番までの中の①最大数説と⑦陰（偶）数嗜好説はどちらかというと同前の遷宮で皇學館の理事長をつとめられた櫻井勝之進さんが提唱された説です。この説は聖数説と呼ばれ⑦番と①番を合体したものです。日本文化興隆財団発行『遷宮のつば』（神社本庁監修・日本文化興隆財団企画、扶桑社、平成二十五年）において私の方で「神宮式年遷宮の意義」を執筆して、そこに式年七説をまとめています。そこで一説足りないのは何かといいますと、歴代在位年数説です。これも國學院大学の岡田荘司さんがいいたされた説ですが、古代天皇の平均在位年数がおよそ二十年ということから導き出された説で

す。それから、宮を遷す問題については、先程、茂木先生が力説されましたように遷宮は神嘗祭を更に大きくした大神嘗祭というところえ方がありますけれども、それがなぜ宮を遷すのかの答えの一つになろうかと思えます。宮をなぜ遷すのかとの答えには三説あります。一番目は先程の大神嘗祭説です。二十年に一度、大御神様の衣食住を一新して大々的に大神嘗祭を斎行する。皇室でいいますと恒例の新嘗祭を御即位の時は、大嘗祭を大々的に斎行するという考え方と同じでございます。それともう一つは、今朝、渡辺先生が話しておられた歴代遷宮説ですね。いわゆる都で都城制を導入したことによって、一代に一度の皇居造宮がなくなった。そういうことでその遺伝子を伊勢に残そうとした。これが歴代遷宮説であり、ニヤイコール（≒）として一代一宮説とも称されます。三番目と致しましては、伊勢鎮座再演説。遙か二千年前の垂仁天皇の御代に倭姫命が伊勢に大御神様を御鎮座申し上げたのを再演する、つまり神宮の創祀を再演するという説であります。以上が遷宮三説です。私の発表につきましては、これぐらいに留めさせて頂きまして、細かい点につきましては、また討論会の方で発言したいと思っておりますのでよろしくお願い致します。以上です。

（千種）

はい。吉川先生がお話して下さいました。何点がありましたけれども、まず、千三百年の式年遷宮の中の遷宮区分について、これは古代とか近世とかではなくて、誰がお金を出したのか。スポンサーから見た区分ということで、国家制度として国が出した時代、役夫工米の時代、為政者、時の権力者が出した時代、再びまた国が出した時代、民間の遷宮ということで現在実質三回目（第六十回）になるといってご指摘して下さいました。そして、もう一つは遷宮諸祭です。今回の式年遷宮でも平成十七年から三十三回の諸祭が行なわれていますけれども、それも遷宮祭と造宮

祭とにわけられるというお話。そして、その式年遷宮がなぜ行なわれているのか。そして二十年内に移動していた古代、そして近世に入って二十年毎に行なわれていた。その二十年、式年の部分では七説ある岡田先生の資料に加えて、歴代在位年数説というのを加えられました。そして、遷宮の方ですね。なぜ宮を遷すのかというのも三説あるということ、大神嘗祭であるということ、そして二つ目、歴代遷宮説。先ほど、午前中の渡辺先生のお話ですけれども。三つ目は伊勢鎮座再現説。伊勢に鎮座されるにあたって倭姫命の巡幸というのがありますが、その再現説ということ、を明らかにして下さいました。お三方から様々な御意見が出ましたけれども、岡田先生、皆さんのお考えをお聞きになって、答えて下さる所がおりになるかと思えますけれども、まずそれをお聞きしたいと思えます。

(岡田)

勝山先生に言って頂いた役夫工米については、色々研究が進んでいます。私は、小島鉦作先生のをそのまま載せて、最新の研究というものを踏まえていません。ご指摘の点を十二分に考えていかなければいけないと思います。中世の神宮史研究は、非常に進化していると思いますが、具体的な部分がよく分からない点もあります。役夫工米が、全国に賦課されようが、部分的に賦課されようが、どういう形で伊勢まで税の米が、集まってきたのか。誰が取りに行つて、誰がどのような形で伊勢まで運んで来たのかとか、あるいは御神宝装束類は、京都からどのようにして神宮に持って来たのかなど、具体的な部分について、細かいメカニクも知りたいと思つていますが、よく分からないのが現状かと思えます。

例えば、遷宮の回数ごとにどのくらいの割合で、役夫工米が利用出来たのか。全総額に対して何パーセントで、足らない部分は室町幕府の將軍家が出していたのか、あるいはもっと広く色んな人が関わっていたのかなどについて

も、明らかにできればと思います。そういった流れの中で、伊勢信仰を伝えた人、御師の役割はかなり大きかったと思っ
ています。そういった部分を、もっと知りたいと思っ
ています。法令というのは、出されて、完全に上手くいく
とは限りません。その中のどれだけが、実質的に行なわれたのか、行なわれなかったのか。そういった点を、勝山先
生に、こう考えるべきだと言っていたいたしたのは、有難いと思います。神戸・神田は、おそらく、長期的な衰退とい
う言い方はよくないと思います。変質と言った方がいいのかと思っ
ています。衰退というと、最終的には無くなつて
しまったように思われますが、決して無くなつておらず、長く残っていることからすると、変質していったと言
う方が、いいのかなと思います。

それから、茂木先生からも色々言っ
て頂いて、恒例祭、三節祭、そういった祭祀が神宮にとつて極めて重要であつ
たという事はわかります。神嘗祭のあり様を考えたら、祈年祭に始まり神嘗祭に終わる。伊勢では、神嘗祭が正月を
示している。神嘗祭が終わつてから、一年が始まると考える。そういうサイクルを考えれば、祭りが基本で中心
になる。神宮側、祭祀をする側から見れば、当然のことであると思っ
ますが、祭祀があつて、初めて神祭りがつな
がり、神祭りがあつて、人の安泰が保障される、そういったことが、日本人の考えてきたシステムだろうと思っ
ます。神祭りが無くして、自分たちの安泰はない、というのが日本人の本質だろうと思っ
ます。そういう点での、ご指摘は有
難いと思っ
ます。

それから吉川さんとは論戦をしないと
いけない部分がある様に思っ
ますが、やはり神職の立場の人と外野サイドで
考
えている私たちとは、本質において違
う部分が出てきても当然だろうと思っ
ます。先ほど、式年遷宮が始まったこ
とは、天武天皇あるいは持統天皇の思
召しが基本だろうと述べましたが、こ
れは壬申の乱が無かつたら、式年遷宮
はなく、修造の繰り返しで来ていた
と思っ
ます。そういう面で、今日は敢えて原
点に立ち返つて考えるべきだと思っ
ま

す。今言われた色々な説、二十年だとかあるいは遷宮の持つ意味だとかは、後の人が後付けで考え出された説ではないかと思えます。二十年を理解するために、それを信仰的価値へと、どんどん拡げて考えていった部分が結構あるのではないかと思えます。

例えば、二十年ごとに宮を遷すという考え方は、倭姫命が伊勢の地にお宮を遷したということの再現と考えるべきだろうと言われましたが、そういった事は後付けの論理だと思えます。天照大御神のお宮、これは垂仁天皇の御代から建物をずっと維持管理していく中で劣化していく。間違いなく劣化していく中で、修造は絶対していかないといけません。大来皇女が、齋王に任じられた時、皇大神宮は徹底的に整備され、天武天皇・持統天皇の思いからすれば、大来皇女を齋王として任ずるという段階で、おそらく神宮の徹底的整備がなされたと思えます。その意味では第一回の式年遷宮にしてもよいぐらいの思いがあつたと思えます。それから二十年くらい経つと修造していくという形では十分に捉えきれない。やはり新しい宮地を作つて、新しい建物を建てる。その時に大きく関わつたのは、藤原宮という新しい宮造りが、これに関係するのだろうと思えます。

いわゆる人の宮、政事の世界は、大陸風の影響を受けますが、天皇の居所である内裏は、日本古来の掘立柱式で檜皮葺、あるいは板葺や萱葺といった素木造りの建物を使用し、それに対して大極殿・朝堂院の政事の区画では、大陸風の礎石立ち朱塗りの瓦葺建物を建てています。そう言った新しい志向、新しいものが入ってきた時に、日本古来の建物のあり方を十二分に考慮されたと思えます。明治天皇の時と一緒で、ある意味で明治維新という時代と壬申の乱前後というのはよく似た時代ではないかと思えます。基本的には、大化の改新のときに始まっていると思えます。大陸との軋轢の中で、大陸風の制度がどんどん入って来る。あるいは大陸風の儀礼が入って来る。その中で日本的なものを守りたい、日本的なものを志向していききたいという部分を、徹底的に守りたいと思つて考えたのではないかと思

います。その中で、神の宮、祭事の世界は古代以来のものを使うことがあったのかと思います。但し、ここで大きな違いは、南北に非常に長い宮域を設けているというのは、今までの日本には無かったものであるかと思えます。どちらかといえば、東西に主軸を置いた建物、平面区画を持つというのが基本であったのではないかと思います。三輪山の麓で確認された纏向遺跡の宮殿建築は、東西に主軸線を持っています。現在の宮は、南面していますので、あくまで南意識「天子南面す」という中国的思想の下で建てられています。そういう事からすると、やはり日本人の発想としては、日の出の方角である東を重んじて造営され、それが伊勢に繋がっているのではないかと思います。実際、神宮の宮域というのは、お白石持ちで石を盛っていますので、かなり下に古い物がある可能性があると思います。それは掘って確かめることは出来ませんので、そのような時代変遷を証明していくことは難しいと思います。しかし、壬申の乱前後というのは、国家的に大きく物事が変わった時代で、壬申の乱の経験は、大化の改新の理想を完成させる上で、極めて大きな意味があったと思います。

(吉川)

やっぱり壬申の乱の影響というのは大きかったと思います。それは『二所太神宮例文』・『太神宮諸雑事記』に書かれていますのでそうだと思います。それまでおそらく社とか祠とかといわれたものだったかと思えます、ただそれは皇祖神ですから小さな神社の社殿じゃなくてかなり大規模なものだったと推察しています。それが宮へと変貌したのが、まさしく第一回の式年遷宮の時だったと私は考えています。

前回の第六十回式年遷宮で、おそらく茂木先生も関与されたと思うのですが、遷宮についての論文集が神社本庁から出ています。『遷宮論集』（神社本庁編、神社本庁、平成七年）ですが、この本を手にとって頂くと主要な論文は収まっ

ておりますので、皆様方には是非読んで頂きたいと思えます。私が推薦するのは神社本庁の調査部長だった、岡田米夫さんの「神宮式年遷宮の本義」という論文と、それから建築学者の稲垣栄三さんの「式年遷宮の建築的考察」、それから民俗学者の原田敏明さんの「祭典遷宮について」、この三つの論文は是非読んで頂きたいと思っております。先程来、皆様方には遷宮三説では歴代遷宮説に殆んど傾いておられると思うのですが、例えば後から付加されたものでも、或いは一説だけでもいいんですね、この三説全部が本当ただといって頂いてもいいし、複合的であつてもいいわけですね、ですからそれは皆様には考える自由がございますので、それは皆様方でどんどん考えて頂きたいと思っております。おそらく岡田先生の考え方の根本には前川明久さんが朝廷の朝堂院と神宮の大宮院の内玉垣南御門前に広がっている祭祀空間の中重と呼ばれる齋庭との比較、そして神宮の内院がまさしく、古代天皇の居住空間に当たるのではないかと仰っていることにあるのではないかと思っております。なぜ先程、岡田米夫さんの論文を紹介したかというと、これまでの研究というのはやはり建築学的に見た、或いは御装束神宝を考古学的に研究するという、どちらかというと目に見えるものであります。岡田さんがいわれているのは、なぜ新しい社殿を用意しなければいけないのか、なぜ新しい神宝を用意しないといけないのか、それは天照大御神の神遷しのためあくまでも前提であると述べておられます。ですから今後の研究というのは私も含めて、祭祀から見た式年遷宮を研究する必要性があるのではないかと思っております。先程、式年七説に世代技術継承説を挙げましたが、古代において人間の平均年齢は二十から三十でしようから、弟子・中堅・師匠というのは成りたちません。しかしながら、現代的には非常に意義のある説です。ですからこれを葬り去ることは良くないと思っております。技術を保存していく手仕事の大切さを説くのには大変役立ちますので、現代的意義としては適當であると考えております。ですから皆様方におかれましては、式年遷宮の定説や通説はありませんので、どんどん考えて私にも教えて頂きたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

(千種)

本当にこの式年遷宮がなぜ二十年に一度なのか、なぜお宮を遷さないといけないのか、本当になぜこんなに議論が出るのかというと、それは文献に書いていないからです。これはやはり後世のものに考えさせる余地を与えたのかな、と話を聞きながら思っていました。会場の方からも質問が来ていますので、ちょっとこちらの方で進めていきましょうか。

(岡田)

まず、独立棟持柱の建物形式が神宮の御正殿に取り入れられた背景には、どの様な理由がありますか、という西脇さんからの質問です。

独立棟持柱の描かれた弥生時代の銅鐸と土器、これは、伝香川県出土のものと奈良県唐古鍵遺跡のものですが、これと皇大神宮の建物、基本的には独立棟持柱で支えられた建物、少なくとも銅鐸や土器に描かれたものについては、倉と考えられます。稲は、弥生時代の人にとっては、命に代え難い物、「命の根」と言われており、この様な建物が今日も存在していることです。その倉を利用して、御神体の八咫鏡を安置する。その様な工夫がなされたのだと理解しています。実際、発掘調査で出土したものをみると、掘立柱式の建物は、縄文時代でも出てきていますが、弥生時代の独立棟持柱を持った建物というのは、規模が大きくて、場合によっては、建物自体が塀で囲まれている構造を持ったものがあります。考古学や文献史学の分野からも、こういった独立棟持柱の巨大な建物をどう捉えるかが問題となっています。神殿、神の坐す建物とみるか、あるいは祭殿、祭りのための建物とみるか、神社で言ってみれば拝殿に当たるものです。例えば、三輪山の大神神社、これは三輪山が御神体で、拝殿が私たちから見ると本殿の様に見

えます。石上神宮も、禁足地が本殿に当たり、拝殿に当たる部分がお宮の様に見えます。いちばん簡単なものは集会所、多くの人がそこに集まって食事や談義をする所。神宮で言えば、五丈殿や九丈殿などの非常に長大な建物、そういったものが考えられるのではないかとされています。結論的には、文献史学と考古学で全然違ったものになっています。文献史学では、あれは祭殿、神殿では無いと。あそこは人が集まって来る、そういった場所であるとされています。実際、お宮で考えてみても、御神体の収まっている建物は小さく、前にある拝殿が極めて大きくて、本殿は極めて小さいのが基本です。ただ、伊勢神宮と比較すると全然違います。伊勢神宮を意識して考えると、御正宮の本殿は極めて大きい。ですから、それが弥生時代の遺跡などの建物と比較してみると、神殿でよいということになっています。

私は先程、垂仁天皇紀を見ると「祠」と出てきて、これはどう考えても宮ではない。ですから、祠が宮になるのは廻廊が付いてかなり立派にされた時が、宮であると思います。そして、ご神体の八咫鏡を納める祠と倭姫命の常住する齋宮を総称して、私は「磯（伊勢）宮」と言ったと考えた方がよいと思っています。つまり元々齋王は、五十鈴川のとおり、現在の宮域内におられ、そして祠の中に天照大御神の八咫鏡が祀られているということです。極めて小さい建物が、本来の出発点ではないかと思っています。そういう事がさきほどの質問の背景にはあると思います。基本的に稲穂は、非常に大事なものですので、御稲御倉みしのみくらという所にも、稲の魂、神様が祀られています。

次に、安芸国の毛利氏が神宮との繋がりを持ったのは、何時からですかという桐田さんの質問ですが、これはやはり外宮の御師の活動が根底にあったと思います。これも実際何時から師檀関係が結ばれたのかということを明確にしていく必要があると思います。戦国乱世の中で、人の移動というのはかなり厳しい部分があって、江戸時代の様に街道整備が出来ていない段階で、人が、例えば、慶光院清順上人などの女性が、行くとしたら、それを支えていたのは

誰か、当然考えていかなければならないと思います。全く支えの無い所を旅が出来るのか。これにはかなりの数、伊勢を信仰している人がいて参詣者を支える人、御師の存在を抜きにしては語る事が出来ないと思います。中世の御師については、充分には明らかになっていませんし、個別の史料も十分に解読されていませんので、この点をもっとしっかり調べていかないといけないと思っています。

次は、長尾さんという方から、伊勢地域の経済活性化は、御遷宮によつて期待出来るでしょうか、という質問です。今回の式年遷宮において、伊勢市駅前も、宇治山田駅前も変わってきました。駅の前は変わりましたが、街全体はどうなっているかと言いますと、そう大きく変わっていません。式年遷宮の年になったら、伊勢が活性化するように見立てがあります。神宮は神宮で、式年遷宮というのは、二十年ごとに淡々とやっておられますが、それにあやかつて伊勢の街並みをどうするかという事は、いつも問題になっています。これが、経済的活性化の中で出てきます。私もいつも言っていますが、伊勢の文化、伊勢の街作りは「瞬間湯沸かし器型文化」だと言っています。熱しやすく冷めやすい。式年遷宮が近づいてくると燃え出して、終わると冷めてしまう。これを如何に継続させていくかというのが、現在の課題だと考えています。

それから、次の質問は、明治天皇の御代まで陛下の御親拝が行なわれなかったのはどういう理由ですか、というものです。これは、式年遷宮とは関係ありません。崇神天皇の御代に、天皇が同床共殿で祭っていた天照大御神（八咫鏡）を宮中から外へ遷され、さらに垂仁天皇の御代になって伊勢に遷されました。どんどん遠ざけていかれました。分かりやく、皆さんの家のことで考えてみますと、家の中に神棚を設け、毎日朝夕お食事を捧げて祈っているに關わらず、お祭りをする時は神妙ですが、一日、あるいは一年といった長い時間で見ますと、神様に見られると困るようなかなか危ういことを行なっています。嘘をついたり、人の悪口をいったり、あるいは神棚のある部屋を散らかして

いたりしています。あれほど神妙な神祭り行なっているに関わらず、神様に見られると困るようなことをしていますので、息苦しくなってきました。おそらく、そのようなことが、災いをもたらすことになる、古代人は考えたと思います。崇神天皇の時に、天候不順となり、疫病がはやり国民の半ばが亡くなるというのは、それが原因と考えられ、宮中から天照大御神を遷され、垂仁天皇の御代には大倭から東の伊勢の地に遷されました。東の伊勢は、若々しい力を持った太陽の生まれ故郷に近い海・山・野の幸豊かな所です。大倭では、それを求めることが出来ないことから、遷されたのだと思います。もし、天皇が直接、天照大御神を御祭りされることになれば、天変地異があつた時は、天皇の神祭りが危ういからと指摘され、政情が不安定になります。当時の天皇は、崩御されるまで天皇であるのが基本ですから、日本のように天変地異が、絶えず起る中で、神祭りと国家の平安を両立させていくのは大変です。そこで、天皇の代わりに皇女を斎王にして、天照大御神を祭り、御自身は遠くから遙拝するという事にされたと思います。また、明治天皇が初めて参宮されたのは、日本列島からの世界から、地球的規模の世界へ、日本人の世界観が大きく変わったからだと思います。

(千種)

幾つか会場からも質問がありまして、幾つか岡田先生がお答えになりましたけども、他の先生方この件に関してはこうではないかと、よろしいですか。

では先ほど独立棟持柱の話がありました。岡田先生が学界によって考え方が違っていて、いわゆる私たちがいう所の拝殿という役割、そして実際に神様をお祭りする役割の本殿に分かれているというのがありましたが、その形を考えていく中で、もう一つお祭りの形も考えていくべきなのかなと思ひまして、今、伊勢神宮という恒例祭ではい

ゆる庭上祭祀ですよね。御神饌を御正殿の中にお納めしてお祭りする形ではなくて、いわゆる御正殿の手前、庭の部
分でお供えをしてお祭りをするというやり方でなされています。けれども日々のお祭り、外宮で行なわれている日別
朝夕大御饌祭というお祭りの中では外宮の御饌殿みけでんの中に御饌をお供えしてお祭りするという二つの形があるのかなと
思いますけども、これはどの様に考えたらいいのでしょうか。

(吉川)

殿内祭祀と庭上祭祀ということですが、御饌殿のことについては『神宮要綱』（神宮司序編、非売品、昭和三年）を見
て頂いたらおおよそ理解できます。おそらく殿内でも庭上祭祀における作法に准じて行なわれていたと考えていま
す。そのくらいしかお答えできません。

(千種)

茂木先生、よろしいですか。

(茂木)

宮中の祭事、賢所のお祭りごとというのは恐らく殿内で行なわれてきたのだろうと思います。そういう伝統とは
違った、ある時期、制度を立てる際に御敷地を二つ設けて、唯一神名造りの御殿を建て、そして広い中重という祭場
を設けてお祭りが行なわれるようになったということと、これまでのお祭りとは違う、まさに新たに形が整えられた
のかなと。神社の祭祀とは比べられない、比べるとしたら宮中の祭祀くらいだと思いますが、そういう意味でも神宮

の祭祀というのは非常に特殊なのかなと思います。

もう一つ、日別朝夕大御饗祭、これは殿内ですが、これも変遷があるようですが、御神座が設けられてその前に食膳をお供えをするという形、まさに人の住まいの様なお食事をする場所という設えでなされている様に思います。これはどういう風に考えたらいいのか、ちよつと分からないですが、そういう形を整えた時代があつたのかと思います。

(岡田)

神宮の宮域には、滝祭神など全く社殿の無い神が祭られています。殿内も何も関係なく庭上しかない。そのイメージから言えば、より古い形が庭上。いわゆる祭りの都度、神様に来て頂く場所です。そして、建物が出来てそれに入っていた。そういう事もありますし、そうでないところもあります。いわゆる御正宮というのは、それ自体が神秘性を持っており、一般の人が簡単に入れるところではありません。神職さんも簡単に入れるところではありません。午前の研究発表で、渡辺先生が言っておられましたが、古いお宮から新しいお宮に神様が遷ると、旧社殿のオーラが無くなり、新しい方にオーラがあるように見えるとされています。建物自体が、神の坐す場所となっているわけです。

(吉川)

学問的な話と実感としての話の両方の考え方を持つておられた方がいいと思います。神様という勿論、目に見えない存在に御奉仕する訳ですから、言葉を超えたものというのは当然あるかと思えます。現神宮禰宜の河合真如さん

が「永遠の今」（『遷宮のつば』所収）の中で、前回の第六十一回式年遷宮の時に伊勢の読売新聞社の村田博明さんという記者が遷御の儀を取材されて、どういう感想を持たれたかというところ「言葉を扱う記者として現場では冷静に観察しようと考えていた。しかし全く言葉を寄せつけようとしないう『時』に遭遇しようとは」と述べられたことを紹介されています。ですから言葉では説明の付かない、表現できないということもあるんじゃないかと思います。いま風のいい方をするなら大いなるエネルギーとか波動に満ち溢れた神様がお遷りになられる偉大な瞬間ということだと思います。

それと伊勢だけで式年遷宮のクライマックスである遷御の儀をとらえると充分ではないということを知って頂きたいと思います。式年遷宮の遷御の日は、内宮ですと平成二十五年十月二日午後八時、外宮ですと十月五日午後八時ということですが、陛下に御治定頂きましたが、当日は齋館から神職は午後六時に参進となります。午後八時というのが陛下の御治定になられた時間で、本宮を大御神様がお出ましになられる出御の時間が正八時ということになります。その前の次第行事であるお祓いや玉串行事等はすべて済ましておかなければなりません。また渡御の路程では数多くの御装束神宝が奉持されるわけですが、その準備もとのえておかなければなりません（召立行事という）。更には大御神様を御隠し申し上げるための絹垣等も用意して出御に備えるわけです。なぜ正八時の出御になんとしても合わせなければならぬかといいますと、陛下が東京から庭上下御の作法で遥かに伊勢の大御神に祈りを捧げられている時間であるからです。二十世紀最大の宗教学者のミルチャ・エリアーデが、祈りとか想いというのは時間とか空間を超えるということを行っています。まさしく東京と伊勢はその時、陛下の祈りを通してリンクしています。ですからこれは日本国全体としてのお祭りであって、伊勢のものだけではないのです。東京で陛下が祈りを捧げておられる日本国最大にして最高のお祭りが遷御の儀であることを理解して頂きたいと思えます。

(千種)

残り二十分ほどになってきましたので、先生方に五分くらいでシンポジウムの中で皆さんに仰りたいことがあれば言っておきますでしょうか。

(茂木)

今、吉川さんが、陛下が東京の神嘉殿の前の庭でまさに庭に降りてそこから出御の時間に拝されると言われました。今、庭上下御と庭上祭祀が関連するかなと思って聴いていましたが、そういう形であつて毎朝御拝とか、石灰壇で伊勢の方角を拝礼されていたのを継承する形だと思うのですが、尊い人が土の上に立つというのは大きな意味があるのだなと思いました。今日こういう形でシンポジウムに参加させて頂き、岡田先生の熱のこもった御講演を頂いて、大変、勉強する所が多かつた訳ですけども、今回の御遷宮は一般の人の関心が非常に高い。その関心の高い人達が、恐らく何パーセントかは伊勢にお参りに来られていると思うのですが、簡潔に式年遷宮、伊勢神宮とはこういうものだという事を若い人にも知ってもらうのは非常に大事でないかと思ひます。恐らくそういう事で神宮、広報課にも前回遷宮の数倍の問い合わせがあつて、色々聞いてくる、あるいは報道させて頂きたいという形で問合せがあり、仕分けが大変だと推察します。殆ど神道、神社に関する知識が無くなつてしまつて、逆に関心が高くなつてしまつていてという印象を持ちます。戦後は私たちの世代は占領政策の非常に大きな影響があつて、神社は軍国主義の温床だと、そういう決めつけが非常に浸透して、何か神社に対してわだかまりがあつたと思うのですが、そういうものが無くなつた世代にとつては、何か力を頂ける場所と、関心が非常に強くなつてきているのじゃないか。そういう所に正しい歴史、歴史の中での展開、どうして守られてきたのかという事をしっかりと伝えていく必要があるのではないかと

シンポジウム「伊勢の式年遷宮を考える」

というのが今一番思っている所です。

吉川さんが最初に仰った中で、遷宮の費用をどの様に出すかというので遷宮の時代区分が出来るというお話がありました。大きな目で見れば日本国民の税金だったり、役夫工米であったり、時に権力者の資金であったりする訳ですが、日本国民が負担しているのには違いはないですが、戦後は全く国家が関与しない、天皇陛下の思召しがまずあり、これは古代以来変わらずに一貫している訳ですが、国は関与しない。今年はお出雲大社で遷宮が行なわれましたけど、江戸時代の国宝の社殿ですので、国宝の修理ということで国費が出る訳ですが、最も尊い皇祖神をまつる伊勢の神宮に対してそういう措置が無い。徹底した政教分離を行なっている日本であって、まさに出来ないことであろうと思うのですが、しかしこれは不自然だと、不自然だということをしつかりと日本の国民が持つことが大事なのだらうと思いますね。そのことをやっぱりこれから、おかしいのじゃないかと、少なくとも天皇陛下は御手許金を蓄積されて、その中から神宮に御献進されていると伺っていますけれども、天皇陛下が垂範して我々は現在国民総奉賛ということで社界を中心に頑張っていますけども、これはやっぱり不自然だと。なんらかの形で国が関与する、そういう制度をこれから、間もなく六十二回式年遷宮は完遂されると思いますけど、少しずつ一般の人達にも浸透させて行くことがこれから必要なのかなと感じております。

(勝山)

私は余り言うことはありませんが、二つないし三つお話し出来ればと思います。

一つ目は岡田先生が仰った役夫工米はどの様に伊勢の方に運んでいたかということ。これは国司が一応、国単位で責任を持っていた。そのもとで、あるいは協力して造宮使の所から一国ごとの役夫工米を徴収するために使いが

派遣され、その人が中心になり荘園あるいは国衙から調進される、あるいは荘園領主から出してもらう、それを集めて伊勢の方へ持って来たのだろうと捉えたいのではないかと思います。

それから遷宮についての費用の出し方から区別するということができたが、仰る通りなのですが、朝廷あるいは徳川幕府、あるいは戦国大名、あるいは明治から昭和にかけての政府が出したというのはある意味共通しております、役夫工米もそうですけど、国民から徴収した税金から出しています。税金でもって造営費用を賄う、そういうことで一括出来る訳です。権力者が手元の金を出したと言っても、元々は税金であろうと。ですから大きく分けますと、中世末期の勧進で徴収したやり方と現在の奉賛金のやり方だけが違って、後は皆税金です。その二つに分けてどちらがいかということを考えるべきじゃないかなと思います。

それから三つ目ですが、岡田先生の伊勢神宮の成立時期について、『日本書紀』とか『古事記』の説をもとにお話しされておりますけど、私たちが習い、研究してまいりました戦後の歴史学では、大体そういうふうに見える人はむしろ少数派です。そのことはちょっと頭のどこかに置いて頂きたいなと思います。皆がこういうふうに見える訳ではないのです。私もちょっと勉強しましたけども、やっぱり史料をそのまま信用してはいけないうところが多々あると思っております。但し、津田左右吉みたいに徹底してやるかはまだ別ですけど、それを事実と考えるのはやっぱりちょっと、私などは問題があるのではないかなというふうに思っております。せっかくこういう所に呼んで頂いて水を掛ける様なことを言って申し訳ないですけども、歴史学会全体を見た時にはこういう捉え方というのは少数派だということを引きとって頂きたい。今後どうなるかは分かりません。古代というのは史料も少なくて難しい訳ですが、伊勢神宮の敷地を掘ったりする、そういう時代が来るかわかりませんが、そういうことをやらない限り、いつからということを明白にするのは殆ど難しいだろうと思えます。

(岡田)

今日、勝山先生に来て頂いた本当の意味がよく分かっていただけたかと思えます。私たちが議論している部分というのは、日本の歴史学会の通説的な理解からすると、かなり遠く離れているということです。これをいかに真実に近づけていくかというのは、今後、皇學館大学の教員や学生がやっていかなければならない問題と思っています。いいか悪いかという問題では無く、それを真剣に考えるか考えないか。どうも議論が噛み合わず思考停止状態となっています。これでは、ダメだと思えます。私たちは、丁寧な理論的に議論を積み重ねていって、実証していく必要があると思っています。その点、言わずもがなではなく、先生に言って頂いて良かったと思えます。皇學館にいますと、何も感じず普通に思ってしまうですが、普通でないということを、言って頂いて良かったと思っています。

今回、こういったシンポジウムを開いて、それぞれの立場でお話して頂き、議論が多岐に亘っていますので、上手く纏めて組み合わせるのは難しいと思えます。なにせ千三百年続いたものを、この僅かな時間でまとめて、話そうというのは殆ど不可能に近いと思えます。ただ皆さんに考えて頂く場作りは出来たのではないかと思っています。最初にお話した様に、皇學館大学の創立の主旨を考えれば、こういうことに関しては、皇學館全体でいつも確認していかないといけないと思えます。まして、今年は伊勢に沢山の方がお参りに来られるわけです。ある人は、石に手をかざして温かくなってきたと言い、また巨木に触って温かくなってきたと言う。それで参拝客が増えたというのでは、将来の伊勢信仰を考えると、それは危ういことだと思えます。

伊勢に来られた参宮客が、そこで出会った皇學館大学の学生に質問をすると逃げたり、誤ったことを教えたりするのではなく、率先してあちこち案内してくれたとか、そういったことが、私は一番大事ではないかと思えます。

東京・京都・大阪などは、ほっておいても、人が集まります。伊勢は、天照大御神、あるいは豊受大御神をお祀り

したお宮があつて、こんなにたくさんの方が来られています。もし、このお宮がこの地にお祀りされていなかったら、のどかな農・魚村、場合によっては四日市と同じような大工業地帯になって、自然の代わりに煙突が林立していたかもしれません。こういった豊かな自然の中で、日本人が最高の神として祀る神様が、断えることなく、変わることもなくお祭りされている。そして、その原点について二十年毎に絶えず考え意識していくことが大事であると思います。そして、祭りが今も続いている事をよく理解していく必要があると思います。

今年、富士山が文化遺産になったことから、静岡県と山梨県とが大喜びしています。富士山の頂上に登る目的は何かと言えば、日の出を拝むという事が基本になっていると思います。日の出、それは天照大御神です。誰よりも早く日の出を拝みたいとすれば、列島の東端へ行くか、高い所に登るしかありません。日本で一番高いところは、少なくとも富士山です。そこへ行けば水平線の彼方、一番遠い所が見える訳です。そこで天照大御神を拝む、伊勢というのはある意味で天照大御神という太陽、日の出の神をおまつりしている。大倭王権が東を限りなく意識して、海に近いこの場所に八咫鏡、御神体をお遷してお祭りしてきた訳ですので、そういったことを考えると、式年遷宮で一番肝心の部分というのは、やはり神宮とは何か、どういうものなのか、まさにそこは皇學館大学が創立された時の思い、神宮の古伝を明らかにすることだと思えます。

ここにきて頂いた先生方が一生懸命考えてこられて、私も考えましたけども、やはり人それぞれに考え方も違いは到達点も違う、やり方も違う、みんな違うと思うんですけど、自分と違いのある事をよく聞いて、それぞれがまた自分で考える。そしてそれを説明してあげる。そういう人になっていくのが、皇學館大学のあり様ですから、皇學館大学はなんのために創られたかと言われたら、単なる都会の大学には無い、天照大御神をお祀りした神宮というお宮のあるこの地に出来た大学であるということを、皇學館大学の学生である限りは理解していく必要がある。垂仁天皇が

いなかっただか、いたか、そんなことを論議する為ではなく、垂仁天皇の御代にそういう神をお遷しした。それがどういう意味を持つかということ、真剣に考えて行くことが大事ではないかと思えます。その一環として、この第六十二回式年遷宮遷御の年に、人文学会でこういう会が開催出来たことは、皇學館にとつては最もふさわしいものではないかと思えます。

多分、二十年後にはどなたが残っておられるか、私はいないかなという気がしませんが、やはり四回、式年遷宮のチャンスにかかわれるか、これはやはり私達の命には定めがありますので、役所の戸籍上は百五十、百六十生きていたとしても、生身の身体というのはそこまで残りませんので、そういった意味で若い人たちが二十年後に、こういったシンポジウムを開いて、その時にはまた違った意味、違った切れ味で出来るようにしていただけだと思います。先程、勝山先生が言われたことが、二十年後には逆転して、垂仁天皇の実在がはっきりしている、否定するのは少数意見だということになるかもしれない。学問の発展のために私達は避けて通れない、そういったことがあるということ、そういった事が考えられる機会があったのは良かったかと思えます。

(千種)

午後一時から進めてきました「伊勢の式年遷宮を考える」シンポジウムですけれども、岡田先生の御発題、そして三人の方に加わっていただき討論に移りました。私は執筆業が本業なのでですけど、このあいだ五月の十日に出雲大社の遷座祭を取材させて頂きました。出雲に行ってみますと伊勢も大変な熱気ですけども、出雲も大変な熱気でした。一般の方たちは遷御の儀を見ることは出来ないのですが、沢山の方がその時遠くからでも拝みたいということで来られていました。その熱狂ぶりをひしひしと感じてきました。

出雲と伊勢神宮の式年遷宮が今回ダブル遷宮ということ、大変、話題になっていますけども、前は昭和二十八年という年でした。これは今考えますと戦後の日本の復興のシンボルがこのダブル遷宮だったのかと思います。そして六十年経った年、平成二十五年に行なわれるこのダブル遷宮というのはこの日本にとってどういうものなのか、日本人にとって何を考えるべきなのか、これを皆さんに投げかけてこのシンポジウムを終わらせて頂きたいと思いません。どうも有難うございました。

〔編輯委員会註〕

本稿は、平成二十五年七月七日に開催されたシンポジウム聞き取り原稿に、加筆訂正をしていただいたものである。なお、シンポジウム当日に配布された資料の図・表・史料については、割愛させていただいた。